

聖マリア病院新生児科における超未熟児の実態と問題点 (分担研究：ハイリスク児の調査に関する研究)

研究協力者 橋本 武夫
共同研究者 出良 弘

要約 1989年から1993年に聖マリア病院新生児科に入院した超未熟児について、その予後、治療内容、入院期間を調査した。予後に関しては、特に合併する慢性肺障害の予防、ならびに在宅医療推進が今後のNICU運営のためにも極めて重要であることを再認識した。

見出し語：超未熟児、慢性肺障害、在宅医療

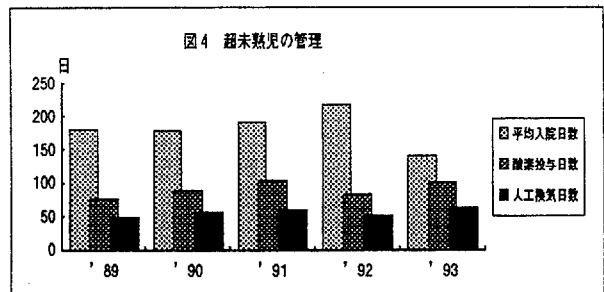
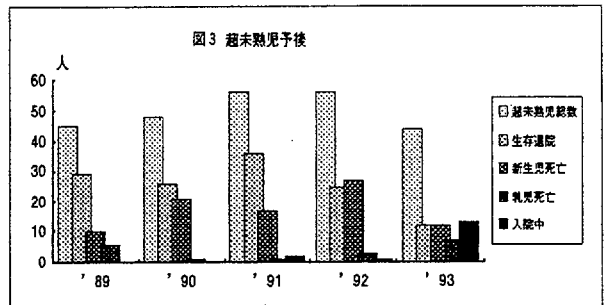
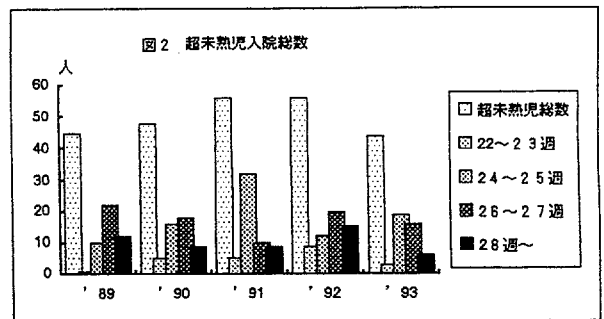
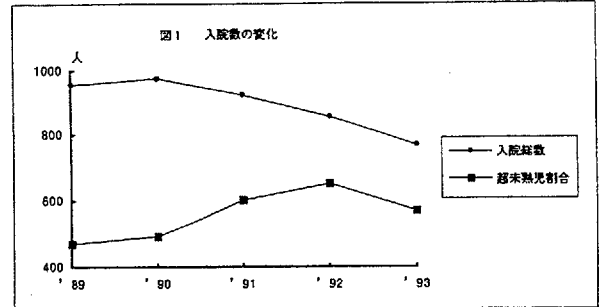
研究の目的と方法：ハイリスク児の予後を考える上で、どのような視点が必要であるかを知るため、1989年から1993年に聖マリア病院新生児科に入院した超未熟児について調査した。

結果：年間入院数の推移についての最近の傾向として、総入院数の減少がみられる。1992年までは超未熟児の入院数に対する比率は増加傾向にあったが、1993年にはこの比率も減少した(図1)。入院した超未熟児の在胎週数で比較すると、1992年に24週未満の入院が増加したが、在胎24週以降のものが主体である傾向に変化はないと言える(図2)。入院した超未熟児の予後については、死亡率は32~53%であり、このうち新生児死亡率は22~48%であった(図3)。

1989年以降、平均入院日数は漸増の傾向が認められるが、酸素投与日数、人工換気日数には一定の傾向は認められない(図4)。また慢性肺障害のため在宅酸素療法を開始した超未熟児は、1991年には2例、92年には3例、93年には3例であった。

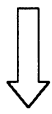
考案：出生数の減少にともない、我々の施設でも入院総数の減少傾向が続いているが、超未熟児の入院数は例年50例前後ではば一定しているといえる。しかし入院する超未熟児の重症化に伴い、入院日数は次第に長期化する傾向にあり、すでにNICUベッドの長期間にわたる占有を引きおこしている。

それに対応すべくクローニックNICU7床を増設したが、焼け石に水の感がある。また重度の呼吸障害が持続するため、在宅酸素療法を開始する症例も年々増加傾向にある。しかし在宅医療を支えるNICU側の体制が未整備であるため、今後考えられる在宅医療患児数の増加には対応できなくなる可能性がある。ひいては入院期間のさらなる増加、NICUベッドの占有化をひきおこすことが考えられる。そこで、重症心身障害児施設などでの人工換気療法が可能となるようなシステムづくりが急務である。





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 1989年から1993年に聖マリア病院新生児科に入院した超未熟児について、その予後、治療内容、入院期間を調査した。予後に関しては、特に合併する慢性肺障害の予防、ならびに在宅医療推進が今後のNICU運営のためにも極めて重要であることを再認識した。